

千刈狸の呟き

10月下旬のある日、鳥海山麓のA川支流のB沢にナメコ採りに行った時のこと。既に紅葉のピークも過ぎてしんと静まり返った沢筋に沿って上流を目指す。ほんの一跨ぎ出来るほどの流れを涉ろうとした時、足元からスッと黒い影が走り対岸の岩の下に消えた。「まさか」と思いつつもそっと手を差し入れて岩の下を探ってみたら一掌に乗ったのは黒っぽい、痩せこけた6寸ほどの岩魚であった。

「まだ生きてくれたのか……！」この数年余り、釣れたことも、魚影すら見かけることもないままであったから、既に絶えてしまったものと思っていたのだ。流れに戻そうとしたその時、魚体をくねらせた岩魚の鮮やかな黄色い腹が目射た一居着きの岩魚の特徴一何代もその溪に留まって命をつなぎ、大河も大海も尾根の向こうの溪すら知らずに、厳しい自然の中でしぶとく生き抜いてきた土着の生命の誇りとその証し。

山あいの集落で農業を営む知人のTさんから聞いた話一あの3・11大震災からほどなく、市でも近隣の県から何人かの被災者を受け入れ、数人の方がその地区の宿泊施設にやってきた。春のお彼岸とはいえ、あたりにはまだ2m近くの雪が残っていた頃。地区の有志が被災者のお世話を担当したが、なにしろ善意そのものといった住民たちのこと、誠心誠意の対応であったことは想像に難くない。

数日してやっと落ち着いたと思われた時、被災者の一人の御婦人がワンワンと泣き出してしまった。張り詰めていた緊張がゆるんだのだろう。震災というとんでもない日に遭ったばかりが、「よりによって、こんな山奥の何にもないところに……」

「避難所はもっと街場のほうにもあるというじゃないか」等々、度重なるわが身の不運を嘆いたそう。その場に居合わせた住民は言葉を失くしてただ立ち尽くすのみであったと。

居着きの岩魚

孫七狸

ナメコ採りの帰り、Tさんのところに立ち寄ってみる。自宅前の細い水路で農具を洗っていたTさん一すでに70代半ば、子供達はすでに都会に生活の場を得て戻ってくることもないという一あの“春のこと”をそれとなく聞いてみた。

「最初はさすがに落ち込んだ。気の毒な被災者から見てもこの地は大変な所なのかと。でもわしらはここで生きるしかないし、よその土地のことなど考えたこともない」

「どんなボロ家でも帰るところ、暮らしていけるところさえあればいい、と」

あの3・11以来、これまで考えたこともなかった事柄について考えなくてはいけなくなった。承知してはいたが、知らぬふりをしてきたことについても。

都会の人々の便利な暮らしは電気も食べる物もどれほど東北の地に依存してきたか。今回の震災の被害の中心になったのはいずれも急激な人口減少や過疎化・高齢化に悩んでいる地域を含んでいる。これらの問題は自ずとそうだったのではない。東京を中心とするこの国の形がそれを促したのである。地方の親たちは子どもたちが少しでも良い暮らしをしてくれればと願い、子どもたちは親を気遣いながらも都会での便利な生活を享受してきた。今回の震災によってはからずも、このままではたちゆかぬぞ、さあどうする？といきなり目の前に問いが突きつけられたわけだ。

Tさんが仕事の手を休めて一服する。紫煙がゆっくりと晩秋の澄み切った空に流れ、空の青さに傍らのイチョウの老樹の黄葉がひととき映える。不意に先刻の岩魚の腹の鮮烈な色が重なり、視野が黄色く滲んだ。